

## K 大で下野亀雄に勉強を学ぶ(その2)

### 2. 最初の訪問

K 大学は、伝統のある大学と聞いていた。確かに、広いキャンパスには古い建物もあったが、新しい建物もあり、色々な個性が入り乱れると言う感じであった。キャンパスで、迷ってしまい、何度も『ゴミ捨て場』に行き着いてしまった。まるで、私を廃却しようと、誰かがたくらんでいるように思って、少し落ち込んでしまった。

それに、着物姿の紳士に三回も出くわした。「こんな人が大学にいるの？」と言う感じであったが、これも伝統のある学校だからと半分自分で納得した。

ようやく、アポの時間に下野教授の部屋にたどり着いた。今までも大学教授に取材したことがあったが、今回は自分が教えてもらうと言うことで、別の感じの緊張があった。下野先生の外見は、普通の中年と言う感じであった。挨拶もそこそこに、勉強の話しに入ってきた。

「田中さんの紹介で、こちらにこられたとのことですが、大平さんはなぜ勉強したいのですか？」

「それが、正直自分でもよく解らないのです。しかし、今の自分に何か欠けているような気がします。学問のなかで何かつかめるような気がしました。」

「ウム。期待に沿えるかどうか解りませんが、とりあえず学生の輪講でも聞いてもらいましょうか？ところで、これまでどのような勉強をされましたか？」

「あまりしていませんが、田中さんに、ヘイグの『理論構築の方法』とウェバーの『社会科学と社会政策にかかわる認識の客観性』を、読むように指示されました。」

「なるほど。それだけですか？」

「方法論だけでは何か判らないので、ウェバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』も読んでみました。」

その時先生は、少し微笑んだような気がした。

「それでは、今週の金曜日の**13時**から**15時**の間に、学部**3**年生がウェバーの『職業としての政治』の輪講を行います。それを聴いてもらいましょう。それから、院生たちの輪講の題材の論文は、ここにありますから、コピーして置いてください。輪講の時間は、水曜の**13時**から**15時**です。」

先生はそういって、**10** ページほどの論文を**5**つ渡された。私は表題を見て、参考文献欄に目を通した。先生は、それを見てうなづいて、次のように言った。

「流石に田中氏の紹介だけのことはある。論文の見方は知っていますね。参考文献で読みたいものがあれば言うてください。手元にあるものは、コピーしても良いです。」

私も直ぐにやり返した。

「先生の選ばれた論文だけ見せていただけると、少し時間が節約できそうです。」

これで先生は、笑って**1**冊のファイルを見せてくれて、コピーして直ぐに返すように指示された。何とか、**1**日目は合格した様でほっとした。**3**年生向けの輪講の著者が、マックス・ウェバーだったのは、幸運だなと思った。とりあえず、岩波文庫の「職業としての政治」を買って読んでみたが、比較的読みやすいと思った。

### 3. 勉強の始まり

しかし、**3**年生の輪講の席での下野先生の追及は厳しかった。ある一人が、始めの部分を要約して説明したら、次のような質問が飛んだ。

「君は、『カリスマ的支配は、先の首相のようなもので望ましくない。』と言ったが、『望ましくない』というのは、ウェバーが言ったことか？君の意見か？」

「それは、あの一」

「私は内容を、要約して説明しろと言った。意見に関しては後で聞く。著者の記述内容と、自分の意見をきちんと区別しなさい。」

次に、皆の意見を言う段階でも、厳しかった。特に著者の言ったことの丸写しに厳しく、一方、自分の意見を言った場合には、次のような質問が飛んだ。

「君の言いたいことを、一般原則で言えばどうなる。そして、その原則にその事例が当て

はまると、どうして言えるのだ？君は『カリスマ的支配』と言うことを、どう定義しているのだ？」

これは、冷静に考えれば、「事実と意見の分離」や論理的な考え方の基本を、しっかり確認しているのだが、ここまでしっかり身につけさせる訓練が凄いと思った。一方、自分は今までの読みが甘かったと、落ち込んでしまった。とても自分には、この席で発言する資格などない。聴いているしかない、少し落ち込んでしまった。但し、これはまだ入口だった。院生の場合にはもっと厳しかった。

「著者の言いたいことを、まとめているが、それに対して君はどのような意見を持っているのか。この論文では、こう言っているが、参考文献ではどうなっていた。参考文献の内容からどれだけ変化したか調べたか？」

「参考文献 1 より、『政治』の概念が、より精密になっています。私の意見では、この定義の方が現状に合うと思います。」

これを聞いて、田中氏が参考文献まで読んでおけといった意味が、よく解った。

また、院生の論文に対する質疑は、輪をかけて厳しかった。

「それで、新しい発見は追加したか？査読者の時間をつぶすだけではないのか？」

「私の観点での、『貴族社会』の機能は、今までないものと考えます。」

「それに対して、反論は検討しているのか？」

「日本の事例が特異だということで、反論を検討しましたが、英仏でも規模は小さいが、同じ状況は発生しています。」

「英仏では、キリスト教の影響があるが、日本では少ない。その部分はどう説明する。」

「プロテスタントの思想と、儒教的精神の関連で…」

「本当に、儒教的精神と言っているのか？君の言っている儒教とは何か？陽明学と朱子学のどちらだ？もう一度検討しなさい。」

ライオンが子どもを崖から突き落とすと言うのは、これかと思った。しかし、議論の席を離れた下野先生は優しくかった。私に、三段論法の使い方について、丁寧に教えてくださった。また、論文も単独で読むのではなく、時系列的に関連論文を読むほうが、主要概念とその利用状況が頭の中に残っているので、効率的に読めるということも教えてもらった。

一方、時々には厳しい意見も頂戴した。特に、ジャーナリストの仕事について、ウェーバーの言った、

「本当にすぐれたジャーナリストの仕事には、学者の仕事と少なくとも同等の『才能』が要求されていると言うこと一職業がら彼らは命じられればその場で記事を書き、まったく違った執筆条件の下でも間髪を入れず活動しなければならないところから、特に右のことが言えるのだが一このことは誰にも分かっているとは言えない。」

と言う一節の時、私を見て、

「あなたは速く理解して、即座に説明をする仕事のプロですね。」

と言われたのには参ってしまった。

そうして、1ヶ月間はただ聞いていたが、その後は3年生の輪講に関しては、質問することを許された。ただ、院生の論文には、まだ理解がついていかなかった。最初は何を言っているのか分からなかったが、少しは解るようになったのは、進歩とは思いが、なぜこの論文が良いのかよく解らなかった。そこで、思い切って、先生に質問した。

「先生は、どうして『先ほどの論文が良い』と褒められたのですか。」

「そうですね、大きく分けて2つの評価ポイントがあります。一つは、議論の展開がしっかりしていると言うことです。貴女はヘイグの本を読んだそうですが、良い理論の条件をヘイグは書いていましたね。あれほど厳密でなくても、主要概念の定義とその間の連

結がきちんとしていることが、最低限の条件です。しかしそれだけでは、面白い論文にはなりません。何か新しいことが必要です。先ほどの研究では、新しい“理念型”を導入していましたね。これを私は評価しています。」

「そのような研究は、どうしたら出来るのですか？」

「それを、言葉で伝えることが出来たら、苦労はしません。研究室で、先人の話を聞いているうちに、できる人はできるようになります。確かに、ヘイグの方法論はそれなりに効果がありますが、それだけではありません。しばらく、色々聴いてください。」

「それから、先日の論文も同じように論旨はしっかりしているように思いましたが…」

「あの論文ね。彼は、社会が時間経過と共に、よくなっていくという前提を、無意識に使っていました。」

「それって正しいのではないですか？」

「正しいかどうか、これは議論の余地があります。しかし、彼は其の前提を無意識で使っていました。無意識に使うことと、明記した前提として、議論することには、大きな違いがあります。無意識に取り込まれている限り、ウェーバーの言う『価値自由』が出来ていません。」

これを聞いて、本で読んだ内容を、しっかり実行しないといけないと再認識した。この後私は、下野先生に、院生の輪講での質問を許されるようになった。

#### 4. 最初の報告

輪講で聴講しながら、下野先生の質問を聴いているのは、色々勉強になると思っていると、ボールが私に飛んできた。

「大平さん、一度自分で発表してみる。」

ここで引くと後が無いと思ったので、思い切って返事した。

「はいやらせてください。どの部分ですか？」

すると先生は、にやっと笑ってとんでもないことを言い出した。

「ウェーバーの『職業としての学問』を、まとめて来週の院生たちの輪講で発表してください。あなたに3年生たちの輪講では失礼ですから。」

とんでもないことになったと思うが、もうあとは無い。「職業としての学問」は、「職業としての政治」と一対で、前に行った講演と言うことは知っていたが、これを1週間でまとめるのは、とんでもないことだと思った。すると、下野先生がぼそっとつぶやいた。

「アメリカの院生は、論文を渡したら、1時間でレジメをつくって報告するように訓練しているそうだが、僕はまだまだ甘いな。」

とんでもないと思ったが、何とかしようと思って、早々に退席した。

確かに、文庫本で実質66ページなので何とか1週間で読めるかなと思って、まず通読してみた。ウェーバーらしい厳密で複雑な言い回しは相変わらずであったが、学問の専門化や、靈感の必要性とそれを支える作業と情熱など、納得することも多かった。また、『無前提な』学問はない。「もし純粋な経験から出発するなら、人は多神論に到達するであろう」と言う部分は、今まで学んできた、「価値自由」と言う発想が生きているなど感じた。

これを報告にまとめるのは、十数時間を使ってしまった。特に、ウェーバーの使う用語は理念型を明確に意識しないと誤解を招くので注意した。

1週間後には何とか1枚にレジメをまとめて、先生に提出した。すると、直ぐにレジメを院生たちに配り、20分の報告し、質疑10分を受けることになった。何とか要約と、「専門家としての方法論の重要性」を自分としては、重視しているといい終わると、早速院生の皆から質問が来た。特にトルストイとの関連は、自分でも納得していなかった部分であり、そこを厳しく質問されて、少しつまってしまった。しかし本当に恐ろしい突っ込みは、下野先生から来た。

「この本の49ページにある『事実をして語らしめる』～の部分は、どう思います？」

実は、私も「客観性」の本を読んだ時の、いわゆる科学的方法に対する、ウェーバーの反発を知っていたので、ついに言ってしまった。

「たしかに、科学的方法論に対する彼の反発からすると、一寸違和感を感じます。」

すると、下野先生は笑って、次のような恐いことを言い出した。

「原文の表現を確認しましたか？大学で第二外国語にドイツ語があるのは、このような時のためです。翻訳に関しては、誤訳の可能性があります。不審な点に当たったら、自分で確認する。これが重要です。もっとも、ドイツ語はすでに忘れたかもしれませんが、英語訳を探す手もありますね。」

これを聞いて、院生の顔が少し引き締まったように思った。その後先生から、助け舟のような、もっと重たい宿題のようなフォローが来た。

「実は、この部分の誤訳に関しては、既に議論がされています。実は、『客観性』の翻訳補足をした折原さんも注に書いていますね。その外、山之内靖先生の本も読みましたか。」

「岩波新書のマックス・ヴェーバー入門ですね。少し目を通しました。」

「それなら、ニーチェとの関係を、もう少し報告して欲しいですね。ただし、天職の理念型について、少し触れていたのので、合格最低点をあげましょう。但し、『客観性』の本はもう一度読み直さない。特に、補足説明を重点に呼んでください。」

そして、皆が解散した後、先生からもう一度説明を受けた。

「大平さんは、先ほど『違和感を感じる』といいましたね。これは靈感ですね。」

「そうです。」

「しかし、それがなぜか、しっかり説明できない。そこで、ウェーバーが言った『しろうとの思いつきは、普通、専門家のそれにくらべて優るとも劣らぬことが多い。』と言うレベルですね。そこで、『しろうとを専門家から区別するものは、ただしろうとがこれときまった作業方法を欠き、したがって与えられた思いつきについてその効果を判定し、評価し、かつこれを実現する能力を持たないということだけである。』と言う部分を味わってください。これから、しっかりした方法論を身につけてください。ただし、思いつくのも重要な能力です。少し自信を持って良いですよ。」

こうして、私の第1 関門はようやく終わった。この後、「社会科学と社会政策にかかわる認識の客観性」を読み返してみたが、少し分かる部分が増えたように思った。その後は、院生の輪講でも質問したいことがあれば、質問することが許された。

## 5. ゼミにオッサン現れる

下野先生は、時々公開講座を開催している。私も、そのお手伝いをするようになった。ある日の公開講座が終わったとき、変った服装のオッサンが飛び込んできた。彼の感想を聞くと、

「鉄の檻でなく、分業化したシステムで身を守る殻と初めて知った。」

と感激していた。

その日は、先生を囲む食事会も設定したが、そのオッサンも一緒にいたいと、割り込んできた。

食事は、フランス料理のコースであったが、彼は割り箸を要求した。困った人だと思ったが、下野先生が少し微笑んでいたのので、誰も反論しなかった。メインの料理が終了し、食器を下げに来た人と、下野先生が視線を交わした。その時にも、下野先生が微笑んだ。その後オッサンは、さっさと帰った。その後、下野先生が笑いながら私達に、説明してくれた。

「あの人は、学問の世界では、素人かもしれないが、きちんと本を読んでいますね。しかも、マナーについても一流です。」

「フランス料理で箸を使う人が？」

と、ある学生が質問した。

「皆さんは、彼にからかわれたのです。彼の箸の先は、1センチほどしか汚れていません。

箸先五分と言って、和食のマーの基本です。あなたたちが何も知らない素人と、バカにしたので、逆にからかわれました。素人は恐いということを、よく覚えておきなさい。」

この時の下野先生は、少し恐い目をしていました。

## 6. 論文を書いてみる

半年ほどして、私は下野先生に呼ばれた。

「太平さん、一度論文を書いてみませんか？」

まだ私には早いと思ったが、ここで止まっては先がないという気がしたので、思い切って返事した。

「はい、まだ早いように思いますが、書いてみます。」

「それが良いでしょう。テーマについてはどうします。」

「マスコミの力を考えるため、“空気”についてではいかがでしょう。」

「それは面白いですね。ウェーバーの理念型との関連でも議論できますね。」

「そうですね。特に日本の場合は、『価値自由』が実現できていないと思います。そのあたりを、第二次大戦後の日本とドイツを比較して、議論できればと思います。」

「それは良いですね。それでは、**10,000**文字ぐらいにまとめてくれますか。参考文献などを含めて**A4**で**8**枚以内に収めてください。一月でまとまりますか？」

とんでもないことになったが、もう後には退けない。幸い前に、「マスコミと『空気』の関係」について調べたこともあり、しかも前に「職業としての学問」の輪講で話題に出た、「事実をして語らしめる」と言う日本の教育姿勢に、『空気』を引き起こす一つの要因と言う直観があったので、何とか書けると思った。ただし、直観だけでは論文にはならない。厳しく評価した証拠を積み重ね、反論の可能性を考慮しながら論理的に議論を積み重ねる。しっかりした方法論が、学問の専門家として認められる条件であると、「職業としての学問」で議論した内容が、身に染みた。

まず最初に、従来の研究もきちんと調査しないといけない。山本七平氏の議論は研究論文として使いにくいので、慶応の伊藤陽一先生の研究を前例として、議論を展開することとした。

文章は書きなれているが、論文としてのしっかりした論理展開に持ち込むには、結構時間が掛かった。

## 7. 論文の報告

一ヶ月は、あっという間に過ぎた。自分ではまだ調べたいこと、書きたいことは沢山あったが、とりあえず期限内にまとまったものを、下野先生に提出した。すると、またもや恐ろしいことを言い出した。

「この論文について、来週説明していただきます。なお、あなたの論文について、聞かせていただきたいという人がいますので、その方々に立ち会っていただきます。報告は**30**分で、質疑も**30**分ほど準備しておきましょう。」

大変なことになったと思うがもう退けない。とにかく、しっかり準備しておくしかないと思った。

指定された日に、早い目に研究室に顔を出すと、下野先生以外に**3**人の人が座っていた。その中に、田中氏の顔を見て少し驚いた。下野先生から、**3**人について紹介があった。

「こちらは、うちの学部の小沢教授です。そしてこちらは、**R**大学の工学部の小川教授です。そして、こちらはすでにご存知の田中さんです。田中さんを私に紹介してくれたのは、小川先生です。彼とは、合気道の道場で知り合いました。」

小沢教授は穏やかな顔つきで、私に対する視線も優しくかった。小川先生の表情は、何となく面白がっているような感じがあった。一方、田中さんはなぜここにいるのかよく分からなかったが、少し緊張した顔つきで、なにか殺気を感じた。

報告会は、予定通り始まり、私の説明は時間通りに終わった。その後、質疑応答が始まった。まず下野先生から質問が飛んできた。

「この論文で、伊藤先生の研究に対して、日本では『空気』が発生しやすい。その理由は学校教育の論理性の欠如と言っているが、その根拠は？」

「小学校から中学校の国語教科書で、事実と意見の分離がきちんと出来ていません。一方、欧米の教科書では、事実と意見の分離や論理性がきちんと教えられています。」

この時、小沢先生が少し微笑んだように思った。これで、一応クリアしたと思ったので、

少し楽になった。だが、下野先生はますます厳しく突っ込んできた。それを何とか答えることができてほっとした。周りの空気も大分温かくなったように感じた。しかしそこで、予想外の田中氏から、刃が飛んできた。

「この論文で、理念型の考え方を使っているのは分かったが、その外で方法論上の工夫はなにかしましたか？」

この時、小沢先生が、「そこまで？」とつぶやくのが聞こえた。しかし、誰も助け舟は出してくれない。必死で答えた。

「私の仮説を検証するため、ドイツと日本で比較しました。また日本に関しては、歴史的に遡り、詳しい事例でも成立することを検証しました。これは、制御系の同定の手法を応用しました。」

「分かりました。」

その時、小川先生が低い声で、「無住心剣は合い抜けか」とつぶやいた。そして、下野先生と小沢先生がお互いうなずきあった。そして下野先生が言った。

「大平さん、合格です。ようこそ私達の仲間に、これからは私の門下生と、どこで言っていたいただいても結構です。」

残りの 3 人も立ち上がって拍手をしてくれた。私はなぜか、涙が出てきた。そこで小川先生が、下野先生に向かっていった。

「さすがウェーバーの研究者、弟子の取り方もドイツ式ですね」

「そうですね、学生の場合は、制度として決まったもので仕方ないのですが、個人として迎える場合には、妥協したくないですからね。」

「それから、田中君のこともありがとうございました。」

「いや、さすがに小川先生の紹介ですね。抜き身の刀と向かい合うように感じました。」

その時、田中氏が下野先生に深々と礼をした。小沢先生が微笑ながら言った。

「下野先生も良い弟子を 2 人も得たようですね。」

この話しに私がついいけないので、ぼかんとしていると、小川先生が説明してくれた。

「下野先生は、学生以外はよほどの実力がないと、門下生として認めません。そこに紹介すると言うことは、それなりの覚悟が必要です。つまり今回は、あなたと田中氏の 2 人の入門の関門でした。」

すると、下野先生が苦笑いして訂正した。

「大平さんはともかく、田中さんは恐すぎます。小川先生の所にお返しします。」

小沢先生が補足した。

「田中さん、大平さん、宜しければ私の研究室にも遊びに来てください。ただし、学生に対しては、お手柔らかに願います。」

これで皆が笑い、3 人は帰っていった。

## 8. 幕間劇

田中さんの質問中に、小川先生がつぶやいた、「無住心剣は合い抜けか」という言葉の意味が、頭に残りずっと気になっていた。そこで久しぶりに、後輩の藤田幸恵の家を訪ねたとき、つい口に出してしまった。すると、私達にお菓子を運んできた、幸恵の母上利恵さんが説明してくれた。

「無住心剣は、江戸時代の剣術の流派で、禅の教えを剣術に生かした流派よ。その極意は、お互いが死ぬ相打ちといわれているけれど、その上にお互いに生き残る合い抜けがあると聞いたことがある。私も何となく解る感じがする。最初に技を出すときは、自分も死ぬが、相手にも必殺の技をと相打ち覚悟で切り込む。しかし、そこで相手も最高の技を出す。そうすると技同士が命を持って、お互いがすれ違っていく。そのようなことが起こるの。」

幸恵が聞いた。

「実際に経験したことはあるの？」

「残念ながらないわ。でもそれに近いことは出来るような気がする。あなたのことで、田中さんにはお世話になったけれど、何もお返しが出来ていないし、あの人も武道に興

味があるようだから、一度試して見る？」

「どうするの？」

「あなたは田中さんの連絡先を知っている？私がお見せしたいものがあると言って、呼び出してくれる。」

「分かった。携帯番号は聞いているから電話してみる。」

そして幸恵は電話した。

「田中さんですか？藤田です。お久しぶりです。突然で申し訳ないですが、母がお見せしたいものがあると言うことで、一度来ていただけないでしょうか？分かりました。直ぐ来ていただけますか。」

幸恵は、少し驚いたようで、田中氏が直ぐ来ると報告した。利恵さんは、それを予測したようにうなづいた。そして、着替えてくるといって、奥に引っ込んだ。しばらくすると、空手着に着替えて出てきた。少し驚いた私に、幸恵が

「母は高校時代に空手で日本一になったことがあるの」

とささやいた。そうしていると、玄関のチャイムが鳴り、田中氏がやってきた。利恵さんが空手着で迎えたが、田中氏は平然として次のように言った。

「やはりね。ところでどこでしますか。」

利恵さんも平然として応じた。

「宜しければ、近くの公園で如何でしょうか。大平さんも来ています。それで、ごしたくは？」

「私の場合はまともな流儀ではないので、このままで結構です。」

利恵さんはうなづき、私達にも一緒に来るように合図した。公園は歩いて、数分の所だった。田中さんと利恵さんは、3メートルほど離れて、両手を前に交わらせて、お互いに礼をした。そこで利恵さんが口を切った。

「娘が大変お世話になりました。お礼に私が習った、沖縄手をお見せします。私は、糸東流は摩…」

「お待ちなさい。この立会いは、流儀の許しを得ていますか？」

「いいえ、しかし娘がお世話になった以上、私としても最上のものをお見せしたい。」

「それなら、流儀・師匠は聞かなかったことにします。私も、名乗る流儀ありませんし。」

「ありがとうございます。それでは！」

その後、一瞬で起こったことは、何がなにかよくわからなかった。何か、腹にずんと響くような、低い声が聞こえたような気がしたが、田中氏が滑るように前に進み、右手が鞭のように利恵さんの顎に向かって飛んだ。しかし、利恵さんも同時に動き、右手が拳になって、田中氏の右手を下から弾いていた。そして、二人は飛び離れて、お互いに微笑んだ。田中氏が言った。

「突き受けですね。基本の技が極意になる。確かに見せていただきました。」

利恵さんが答えた。

「今の業は？首里手のようにも見えましたが？」

「居合いの袖擦り返しの応用です。」

そこで、田中さんが私のほうを見て、付け加えた。

「合い抜けを、理解できましたか。これは命がけです。」

私も何とか返事した。

「前のご質問ありがとうございました。田中さんが学者生命をかけていただいたこと、改めてお礼します。」

## 9. 素人は怖い

その後、私は下野先生の元で、しっかり社会学と学者の専門手法を鍛えられた。

学会の研究会の発表も一度させていただいた。その時は怖かったが、下野先生の最初の質問と比べれば、楽なものであった。

そして一般向けの講演にも、下野先生の代理などで、お声が掛かるようになった。そこで、学会より楽と言ったら、下野先生にこっぴどく怒られた。

「学会は専門家の集まりだから、ある種の手法さえ使っていれば、評価してくれます。しかし、素人の場合は、直感的に本質を感じる人がいます。素人相手の講演は、幅広い一般知識と専門の深みの両方がないと出来ません。また巷には世に隠れた研究者がいます。一度貴女も、田中さんの前で、講演してごらん下さい。」

確かに、その通りだと思った。マスコミの立場としても、一般読者にはどのような専門家が意見を言うてくるかわからない。それに答えるだけの自己研鑽が必要と、改めて思いなおした。

## 10. 終章

それから 1 年ほど経った。私は、下野先生に一応卒業と評価され、研究室に必要なに応じて、来るように言われた。ある日、下野先生の研究室を訪れた帰りに、田中さんと出会った。彼も帰るということで、私の車で送ることにした。彼が助手席に座り、シートベルトを締めたとき、何となく小さく感じた。気になったので聞いてみた。

「お忙しいのですか？」

「ええ、少し疲れました。」

「おうちの方向は解っていますから、ゆっくりしてください。」

というと、田中さんはほっとしたような顔をした。車は、直ぐに高速に入ったが、横を見ると、田中さんは安らかな寝息を立てていた。その小さい姿が、何となくいとおしく、眠りを覚まさないように、私は慎重に走らせた。